

ワンポイント・ブックレビュー

メアリー・C・ブリントン著、玄田有史（解説）池村千秋訳

『失われた場を探して ロストジェネレーションの社会学』NTT出版、2008年

最近、書店にいくと、新書を中心として、“若者”に関する書籍が多く並んでおり、社会的な関心が高いことがうかがえるが、本書の対象もこれらの書籍と同じく、バブル経済が崩壊した後の1990年代に学校を出た、現在20代半ばから30代半ばにかけての、いわゆる「ロストジェネレーション（失われた世代）」といわれる“若者”である。本書はこの世代の仕事をめぐる問題を、中根千枝の『タテ社会の力学』で提示された「場」というコンセプトから展開されていく。

第1章では、「場」の消失と格差の誕生についてバブル後の日本経済を示し、日本の若者がおかれている現状が示される。とくに、雇用情勢の変化で最も打撃を受けたのが大学に行かない若い男性であるとし、この後の分析はこの層へのアプローチが中心となる。

第2章では、高校の就職部による就職斡旋というシステムがアメリカとの比較を通じて、日本独自のものであることが明らかにされる。とくに、日本がストロングタイズ（強い結びつきの人間関係）を重視するのに対し、アメリカはウィークタイズ（弱い結びつきの人間関係）を重視するという社会の違いを検討する部分は面白い。さらに、第3章では、この高校と企業とが密接に関係する就職システムの機能によって、日本社会で「場」の役割が重視されてきた点が検討されるとともに、これが崩壊し始めている現状が指摘される。

その後、第4章、第5章で「場」の消失が起きてきていることを、著者自身が1990年代に日本で行った聞き取り調査やさまざまなデータをもとに実証的な分析がなされている。第4章では、「日本経済の中心が製造業からサービス業に移行したこと、企業が非正社員の採用を増やしていること、大学進学率が上昇したこと」という3つの要因を元に、高校生の就職事情が変わってきていることが示され、第5章では、高校の就職部による就職斡旋というシステムの状況をデータから読み解いている。

また、第6章では、アメリカの就職事情が展開され、日本との違いを明確にした上で、サトシ、コウイチ、ヒデキという3人のロストジェネレーションについて、就職から現在までをインタビューで追いかけている。

最後の第7章はこのような日本社会の現状を受けて、ロストジェネレーションへの対応に対して、「企業の不当行為から若者を守る、社会の信頼感とウィークタイズの基盤強化、若者の対人関係能力の育成、「場」に帰属しすぎない生き方の構築」の4つの提案がなされている。

全体を通じて、データ分析がしっかりしていることやこれまでの先行研究がきっちり検討されていることなどから、これまでや現状の社会状況がわかりやすいことに加え、本書の秀逸な点は、日米の比較から、日本の独自性を浮き彫りにしている点であり、著者が「何十年も前、日本に恋に落ちた」というだけあって、その日本の分析は的確である。また、翻訳がうまいこともあって、全体に読みやすく、あっという間に引き込まれてしまった。当事者の若者にはもちろんのこと、多く世代に読んでもらいたい1冊である。（加藤健志）